

# 創発の学びを創造する授業の構想 ～授業研究から考える地域音楽教育の向上～

白石文子\*, 菊池真理子・小川暁美・山根大輔\*\*

\*岩手大学教育学部, \*\*岩手大学教育学部附属小学校

(平成28年3月2日受理)

## 1. はじめに

本研究の主題である「創発の学びを創造する授業の構想」は、岩手大学教育学部附属小学校（以下、附属小学校）の研究主題である「『創発の学び』を実現する教育課程の創造」に基づいている。同校において「創発」とは、「個々の考えを合わせながら、集団として新しい価値を創り出そうとする営み」であり、「創発の学び」とは、「日々の教科等の授業はもちろん、全教育課程の中で創発を実現していこうとする集団の学び」である。本研究は、そのような「創発の学び」を、小学校音楽科で実現するための授業を構想することを目的としている。

さらに、本研究の副題である「授業研究から考える地域音楽教育の向上」には、次のような意味がある。岩手県では音楽科の研究に取り組む小学校が少なく、公開授業も多くない。そこで、音楽授業改善のために県内の教員が共に学習する機会を附属小学校が提供することにより、地域音楽教育の向上に役立つような授業研究の在り方について考察する。

また、「地域音楽教育の向上」には、将来音楽教育に携わる、岩手大学教育学部（以下、学部）の学生の教育も含まれている。学生のうちから現在の教育状況を知り、将来教育現場に出た時に役立つことを身に付けると共に、現代的な課題である附属小学校の研究内容を理解することが求められる。さらに、本研究の成果を、学部における教員養成の授業改善に役立てることも意図している。

## 2. 方法

上記のような趣旨のもとに、次のようなプログラムの授業研究会を企画して、県内の小学校、教

育事務所等に案内状を送付し、学部の音楽専攻学生にも参加を促した。

「平成27年度岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業 音楽授業の改善 授業研究会」

日時 平成27年12月18日(金) 13:50～16:45

場所 岩手大学教育学部附属小学校

参加費 無料

内容

- ・研究授業(45分) 題材名 5年生「日本と世界の音楽に親しもう」<sup>1)</sup> (山根大輔教諭) : 日本の音階を使った旋律づくり。
- ・ワークショップ(30分) 「すぐできる!! 楽しい音楽遊び」 (菊池真理子教諭) : 授業で使える、体を使った楽しい音楽遊び。
- ・授業研究会(45分)
- ・ワークショップ(30分) 「授業で使える合唱指導」 (小川暁美教諭) : ハーモニーの作り方や曲作りについて。

研究授業では、「創発の学び」についてのこれまでの研究成果を提案し、後の授業研究会で参加者と共に授業改善について議論した。5年生の音楽教科書の教材に準拠した授業であるため、「創発の学び」を特に意識していない参加者にとっても十分議論の対象となるものであった。

音楽遊びと合唱指導についての2つのワークショップは、「創発の学び」を実現するために必要なコミュニケーション能力や基礎的音楽能力を育むための活動として位置づけられている。「創発の学び」を特に意識しない授業にも活用できる活動例や指導法を、参加者が体験的に学べる内容となっている。

### 3. 結果と考察

参加者は、現職教員13名、岩手大学の音楽専攻学生9名、および筆者ら4名の、合計26名であった。現職教員の内訳は、採用2～3年目の若手と40～50歳代のベテランであり、中間層の参加はなかった。研究授業と授業研究会、および2つのワークショップについての結果と考察は、以下のとおりである。

#### (1) 研究授業

日本の音階を使ってリコーダーで旋律をつくるという、5年生の音楽づくりの研究授業が、山根教諭によって実践された。まず、個々の児童が4分の4拍子で2小節の旋律をつかって学習カードに記録し、次にそれらを班ごとに組み合わせて、日本のイメージを表現する6～8小節の旋律をつかった。その際、新たな発見や様々な工夫を経てグループで新しい価値を創り出そうとする、「創発の学び」が実現されるような授業を構想した。

#### 【写真1】 研究授業



授業では、終始課題に興味を持ち、楽しみながら意欲的に取り組む児童の姿が多く見られた。個々の児童が比較的容易に取り組める課題と、班ごとに試行錯誤する発展的な課題が、簡潔に、分かりやすく、見通しを持てるように提示された。いずれにおいても日本らしい旋律をつくることができ、児童は作品に満足し、達成感を得ているようであった。記譜に抵抗を感じている児童がいたため、簡単に旋律づくりができる、五線譜ではない記譜法を工夫したことも効果的であった。また、1つの班の演奏をモデルとして聴いて全員で考える活動によって、曲としてのまとまりや終止

感を感じるための工夫に、児童自ら主体的に気付くことができた。

しかし、記譜の容易さと相まって、自分でつくった旋律が難しいものになってしまい、リコーダーで演奏することが困難な児童が見られた。また、日本音階を使えば日本らしい旋律が出来上がるが、自分なりの日本のイメージを旋律につなげる工夫（音の上がり下がり、長い音と短い音などへの意味づけ）までには十分至らなかった。これらの点が改善されれば、児童の思いや意図、創意工夫が、さらに生かされる学習になったと思われる。

上記のような課題はあったが、授業の最後に児童が学習カードに書いた感想（授業の振り返り）として、以下のようなものがあげられる。

- ・今日の学習では、リコーダーで日本らしいメロディーをつかって、私は桜がイメージできるようなメロディーを意識してつくって、班で合わせたときに、まだ調整しているけど、さらに日本らしいメロディーになりました。次の学習では、まとまりのあるメロディーを作りたいです。
- ・「日本らしいメロディー」をつかって、班のみんなと一緒に順番を変えたりして、少しいい感じだったので、次の学習は、工夫していい曲を作りたいです。
- ・メロディーを考えて、みんなでつなげて演奏しました。つなげる順番によって雰囲気が変わることが分かりました。

これらの感想からも、班で取り組んだ音楽づくりにおいて、個々の考えを合わせながら集団として新しい価値を創り出そうとする「創発の学び」が実現していたことが伺われる。

また、授業を参観した学生たちの感想文には、以下のような記述が見られた。

- ・真似したいと思う授業だった。
- ・非常に参考になった。
- ・活動や指導法がとても勉強になった。
- ・5年生の授業を見る機会は初めてだったので、とても貴重な体験だった。
- ・授業は難しいと改めて実感した。
- ・本時の授業内容について、偶然事前に小学校の

音楽教科書を見て勉強していたが、具体的な指導法や児童の反応が分からず、現場の授業が見たいと思っていた。児童の課題達成度は予想外に良かった。

学生たちにとって今回の授業参観は、大変貴重な機会だったようである。今後は、研究授業の題材や教材について、学部の音楽科教育法の授業などで事前に勉強させることにより、学生の授業参観が一層価値ある体験になると思われる。

## (2) 授業研究会

約45分間の授業研究会では、はじめに菊池教諭から附属小学校の研究との関連で授業構想の視点が説明され、次いで山根教諭から授業についての反省等が述べられた。その後の質疑応答と意見交換では、旋律で表す日本のイメージ(桜、富士山、城、寿司等)を、児童にいつ、どのように意識させるのか、また、曲としてのまとまりについて、終止感や日本のイメージに基づく表現の工夫をどのように追究させるのか、といったことが活発に議論された。若手教員の感想を含めた現職教員の発言で時間切れとなり、学生からの発言はなかった。最後に学部の白石准教授から、研究会での議論に関連したコメントと、附属小学校の研究主題である「創発の学び」の視点が提供された。

### 【写真2】 授業研究会



授業研究会についての学生の感想文には、以下のような記述が見られた。

- ・先生方の意見がとても参考になり、学びが深まった。
- ・先生方の質問や意見を聞いて、それらの問題に

ついて改めて考えた。

- ・授業の難しさを実感した。もっと多くの実践例を見て研究したい。
- ・児童一人一人が作り出せる力を身につけ、その上で仲間と協力し、そのことに価値を見出すことができることが大切な学びなのだということを知った。全教科に通じるものだと思う。

上記のほかにも学生の感想文では、授業研究会での議論に関する意見や具体的な解決策が述べられており、現職教員の間では話題にならなかった内容のものもある。そのような学生の意見が反映されていれば、研究会はさらに充実したものになったと思われる。今回は時間の関係で、学生に発言の機会がなかった点が残念であった。今後このような授業研究会を実施する際には、議論の時間を十分に確保することが望まれる。

しかし学生にとっては、現職教員の意見を聞いているだけでも大いに勉強になったようであり、附属小学校の研究主題への理解も伺われる。このような機会を生かしてさらに学習を深めるためには、今回のような附属学校での研究授業と研究会の内容を、学部の音楽科教育法の授業などで積極的に取り上げることが考えられる。

## (3) ワークショップ(音楽遊び)

1つ目のワークショップは、「すぐできる!! 楽しい音楽遊び」というテーマで、菊池教諭によって約30分間実施された。「子どものコミュニケーション力を高める音楽遊び」<sup>2)</sup>を参考にして、以下の3つの活動を取り上げ、それらを「友達との関わりで自分の思い以上のものを創り出す」という、附属小学校の「創発の学び」の視点で解釈し、独自のアレンジを加えて実施した。参加者は、授業ですぐに実践できるような、全身を使ったこれらの音楽遊びを、5年生の児童と共に体験した。

- ① 立体茶摘み(わらべうたで音楽遊び)
- ② 宇宙の音楽(歩いて止まって音楽遊び)
- ③ パチ回まわし(拍子で楽しく音楽遊び)

### 【写真3】ワークショップ（音楽遊び）



参加した学生からは、以下のような感想が述べられている。

- ・自分たち大人でも楽しめるような、体も心もほぐれる活動で、音楽との関わりも密接だった。
- ・他の人と協力して取り組む楽しさがあった。
- ・コミュニケーションづくりに役立つ活動だと感じた。
- ・自分では思いつかないような活動で、大変参考になった。
- ・実際に児童の反応を見ながら活動したため、指導するときのイメージがしやすかった。
- ・様々な環境の学校に対応して、どのように活動を工夫すればよいか解説があり、大変貴重な機会だった。

今回提案された活動は、コミュニケーションを通して人と関わり、楽しみながら短時間で音楽的な学びが実現できる音楽遊びであった。参加者に実際体験してもらうことで、これらの活動の良さがより分かりやすく実感できたと思われる。また、児童に活動のモデルになってもらったことも効果的であった。特に、実践経験の少ない学生や若手の現職教員にとっては大いに参考になる活動であり、「創発の学び」にとっても重要なコミュニケーション能力と基礎的音楽能力を育めることを実感できたようである。

#### （4）ワークショップ（合唱指導）

2つ目のワークショップは、「授業で使える合唱指導」というテーマで、小川教諭のこれまでの実践経験と研究に基づいて実施された。参加者は以下の5つの視点から、合唱におけるハーモニー

のつくり方や曲の仕上げ方について、約30分間、実際に曲を歌いながら学んだ。

- ①歌声について教科書はどう教えているの？<sup>3)</sup>
- ②まずは演奏させたい。どうやって曲を覚えさせるの？—耳コピーの繰り返し。楽譜と結びつけながら。
- ③どうすればどの子ども「歌いたい」と思うの？—歌詞の情景や思いを考えさせる。どんな情景なのか or 作者がどう歌って欲しいか。
- ④どうすればハマれるの？—ユニゾンが基本。それから、主旋律：副旋律＝2：8くらいから始める。
- ⑤どうやって曲作りをするの？—指導者が曲を分析し、ゴールのイメージをもった上で、児童に考えさせ、選択させる。テンポは？強弱は？音色は？音の形は？フレーズの処理は？

### 【写真4】ワークショップ（合唱指導）



参加した学生からは、以下のような感想が述べられている。

- ・実際に歌ってみると、とても楽しく、うまくそろって歌えるようにしようと思えた。
- ・音楽専攻の大人にとっても難しいことに驚き、児童が合唱するには大変工夫が必要だと感じた。
- ・自分自身が不安に思っている点について解説があり、実際に歌いながら進められたので参考になった。
- ・自分では歌の発声できていても、それをどうやって子どもに教えるか、具体的に知ることができて良かった。
- ・知らなかった指導法を知ることができ、真似したいことも沢山あり、本当に参加してよかった。

- ・音楽が苦手な児童も楽しく音楽ができるような授業づくりを学ぶことができた。
- ・例えやイメージの語彙の引き出しをもっと増やさなければいけないと思った。
- ・子どもたち自身に考えさせて表現させる指導の工夫に、なるほどと思った。

今回提案された合唱指導法は、音楽が好きな子、得意な子、苦手な子など、様々な児童に力をつけるために、全ての児童が意欲的に声を出し、合唱したいと思える授業を目指したものであった。実際に歌いながら指導法を体験してもらうことにより、授業で使える合唱指導について、参加者と共に考えることができたと思われる。特に学生や若手の現職教員にとっては、具体的な指導法や教師が使用する語彙について自分の引き出しを増やすことができ、貴重な体験となったようである。個々の児童に主体的に考えさせながら基礎的音楽能力を育み、集団でうまく合わせようとする態度も育むという、「創発の学び」にとっても重要な合唱指導法の良さを、参加者は実感できたようである。

#### 4. まとめ

本研究では、「創発の学び」を創造するための音楽科の授業を構想すると共に、地域音楽教育の向上に役立つための授業研究の在り方について考察した。今回実施した学習会を「地域音楽教育の向上」という視点から分析すると、成果としては、授業研究会において参加者から多くの意見が出され、授業改善に向けて活発な議論が行われた点があげられる。また、附属小学校の研究主題である「創発の学び」についても触れることにより、現代的な教育課題の視点を提供することもできた。さらに、2つのワークショップでは、参加者もすぐに実践できそうな、基礎的音楽能力やコミュニケーション能力を育むための活動例や指導法を、体験的に学ぶ機会を提供できた。

若手教員や学生たちにとって今回の学習会は、ベテラン教員による議論や具体的実践方法が、大いに参考になったようである。特に研究授業と授業研究会は、学部における教員養成の授業改善に

も示唆を与えるものであった。今後は、授業研究会において若手教員や学生が積極的に意見交換に加われるよう、時間配分や話し合いの形態を工夫する必要がある。

岩手県の音楽教育の向上には、授業の質を高めることが必須である。そのためにも、教師が参加しやすく、日常のどのような状況でも使うことができるような内容の、今回実施したような学習会を、回数を増やして継続的に行うことが必要である。その際、附属小学校の研究内容を踏まえながら、今回提案したような通常の教科書教材を用いた授業研究を行うことによって、より幅広く地域に貢献できると考えられる。

特に岩手県では面積が広いこともあり、地域によっては生演奏による質の高い音楽鑑賞の機会を多く持てないのが現状である。地域音楽教育の向上には質の高い音楽鑑賞も重要であるため、附属小学校において、生演奏を活用した鑑賞指導の授業研究会を実施することも考えられる。

また、小中連携という視点では、中学校音楽科の現職教員も対象とする学習会の在り方を考える必要がある。小学校6年生を対象とした研究授業や、どの学年にも共通する指導方法等の内容であれば、中学校教員の参加も期待できる。

「創発の学び」を創造する授業構想については、研究授業において、児童がグループで音楽づくりの課題に取り組み、個々の考えを合わせながら新しい価値を創り出そうとしていた点で、一定の成果が得られた。「創発の学び」を創造する授業として、音楽づくりは構想を立てやすく、児童にとってもあまり難しい音楽技能が必要とされないため、抵抗なく学習を進めることができた。しかし、同じ表現領域であっても、歌唱や器楽の指導の場合、児童が「創発」を実現する授業の構想は、より一層困難である。今後は、歌唱、器楽、鑑賞活動についても研究を深め、あらゆる音楽学習活動に共通する「創発の学び」のための汎用的スキルを整理していくことが必要である。

今回実施した授業研究会は、特に若手教員と学生の指導力育成に重要な役割を果たしうることが

明らかになった。今後はこのことを踏まえて、現代的な課題である附属小学校の研究内容を基盤としながら、若手教員・学生とベテラン教員，さらに中間層の教員をも含む交流の機会を提供し，地域音楽教育の向上に貢献できるような研究を継続していきたい。

#### 注・参考文献

- 1) 教育芸術社の小学校5年生の音楽教科書(小原光一ほか13名著『小学生の音楽5』2015)に掲載されている題材である。
- 2) 熊木真見子著『子どものコミュニケーション力を高める!音楽遊びベスト40』明治図書,2006を参照した。
- 3) 教育芸術社の小学校と中学校の音楽教科書(小原光一ほか13名著『小学生の音楽1～6』2015;小原光一ほか13名著『中学生の音楽1, 2・3上』2012)に掲載されている内容を取り上げた。